

教育事務所だより

平成 28 年 9 月 6 日発行

教師の V.S.O.P

調整監 葛西 秀也

「教師の V.S.O.P」

何年も前になるが、県教委主催の研修に参加した時、企画人事主事から聞いた「教師の V.S.O.P」の話が今も記憶に残っている。左党の私は V.S.O.P の音にすぐ引き込まれたのだが、もちろんお酒の話ではなかった。教師のキャリアについての話であった。

20代の教師は Vitality で子どもはついてくる。しかし、30代になると Speciality を身に付けけないと勝負できない。ミドルリーダーとなる40代では Originality が必要であり模倣ではなく教師としての自分を確立せねばならない。50代は Personality で教職員集団としてのチームを牽引するという内容であった。振り返ってみると、確かに20代は生徒と一緒に汗水流す中で教師の喜びを感じ、生徒から学ぶことも多かった。30代になって授業にもようやく自信がついてきたし、生徒指導でも後輩に多少なりともアドバイスができるようになっていた。しかし、この話を聞いた当時40代の私は、自分の Originality は何であるか即答することができなかった。

「進みつつある教師」

30代に6年間勤務した学校には、出勤簿を置いてある机の壁に、「進みつつある教師のみ人を教える権利あり」と書かれた色紙が貼ってあった。毎朝の押印時に目には入っていたが、特に気にすることも無く6年間を過ごした。この学校の後、海外日本人学校に赴任した。児童生徒の転出入が多い学校で、日常的に出会いと別れがあった。短い付き合いだったにも関わらず、友達との別れに涙する子供たち。日本人学校で共に過ごした時間が子供たちにとってはかけがえのない大切な宝物であることを教えられた。そんな時、日本人学校の図書室である本が目に残った。「進みつつある教師のみ人を教える権利あり」また、この言葉に出会った。調べてみると、ドイツの教育学者ジェステルリッヒの言葉であった。日本人学校の一期一会の環境で、教師として1

時間たりとも、手を抜いた指導をしてはいけないと感じていた時期だったので、成長し続ける教師のみに教える権利があることが心の中にずっと染み込んでいった。日本で6年間もこの言葉に向き合わなかったのは、マナーと惰性以外の何物でもなかったと強く後悔した。

「一人ひとり違った宿題」

所長の学校訪問に同行して管内すべての小中学校を伺った。どの学校も児童生徒のより良い成長のために努力されている姿があり、とてもうれしく感じた。その中で、ある小学校では、個に応じた指導の一環として、一人ひとり違った宿題を課す取組をしておられた。頑張っ乗り越える事ができるハードルの高さは、児童一人ひとり違う。担任の負担は大きい、児童個別のハードルの高さが設定された宿題は、児童にとって取り組みがいのある宿題であり、努力が達成感につながる宿題であると感じた。仮に人数が多くて、同じ宿題を出さざるを得なくても、その結果だけでなく、個別にその子の宿題に向かった努力を評価することは出来るはずだと思う。「一人ひとり違った対応をすることが真の平等である」という言葉を思い出すとともに、進みつつある学校を見た思いがした。

「人生二度なし」

どの学校も最高の教育を目指している。そのベースは子供たちの成長を心から望み、その成長を自らの喜びにするために自己研鑽を重ねていく教職員集団であることには間違いない。自己研鑽にもいろいろあるが、読書としてのお勧めは森信三先生の「修身教授録」である。師範学校の学生への講義記録であるが、その講義の根本精神が「人生二度なし」であり、何度読んでも心動かされ、頑張ろうと思う。「教師の V.S.O.P」のマップどおりにいなくても、いつでも人は自分を高めることができる。伊能忠敬が測量に出発したのが55歳。「人生二度なし」何かにチャレンジして、新しい自分を見つけてみませんか。それは必ず目の前の子供のためにもなるはずですよ。

地域とともにある学校

～学校と地域の連携実践研修～

8月初旬「学校と地域の連携実践研修」が行われ、学校と地域の連携について“地域から”と“学校から”それぞれの視点での事例発表を聞き、受講者同士で今後の取組について協議を深めました。「連携する」とは言うけれど、具体的に何をどうするのでしょうか？

国の動き（中教審答申）

教育情報紙第13号（6月末発行）にも掲載されていますが、中央教育審議会から出された3つの答申に基づく様々な改革の真ん中に「**社会に開かれた教育課程**」の実現が位置づけられています。論点整理で示されている3つの視点を読むと、めざしているのは島根県で既に取り組んでいる「ふるさと教育」の発展であることに気付かされます。島根県一歩リード!?

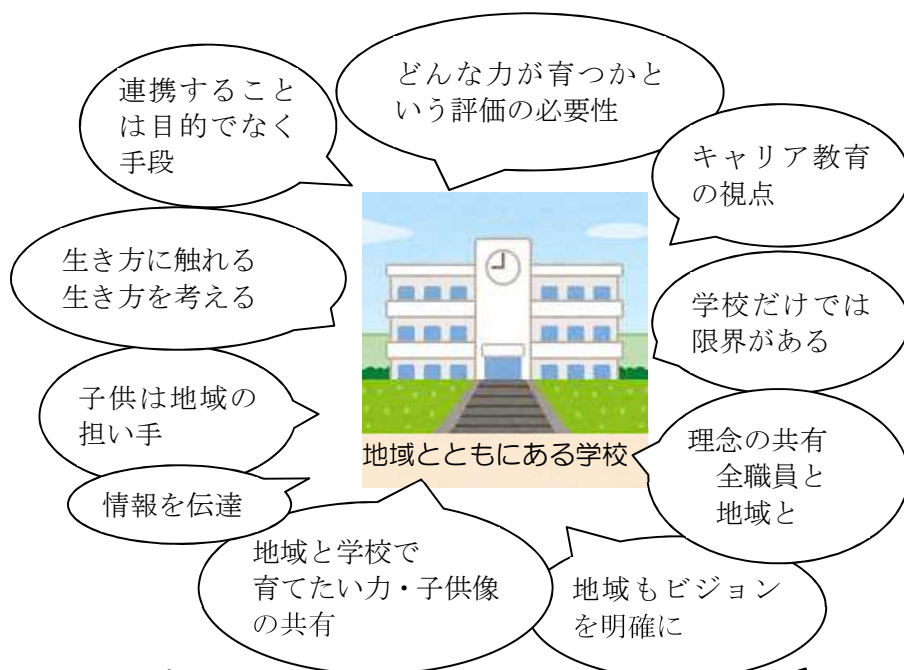
3つの視点

- ①社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標をもち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ②これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じ込めずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。



私たちの動き（島根では）

H17年度から「ふるさと教育」を核に、地域との連携に取り組んできたからこそ見えてきた成果や課題が、研修中随所で先生方から挙がっていました。一番多く聞かれた意見は、“まずは、「育てたい子供たちの姿」を学校も家庭も地域も、子供の育ちに関わる人みんなですっかりと共有し直そう”でした。



研修で挙がった主な成果と課題

県内では連携・協働の結び役として、公民館等の職員やコーディネーター、派遣社会教育主事が既に働いています。子供の育ちを支えようと共に携わってくださる方々も、PTAや各種団体、企業等、多数存在します。地域とともにある学校への第一歩として、まずはこの“人の力”をしっかりと生かし、目指す子供たちの姿を様々な立場の方々と一緒に語り合ってみませんか。

第Ⅳ期 魅力ある学校づくり調査研究事業の指定を受けて！

～安来市教育委員会の取組～

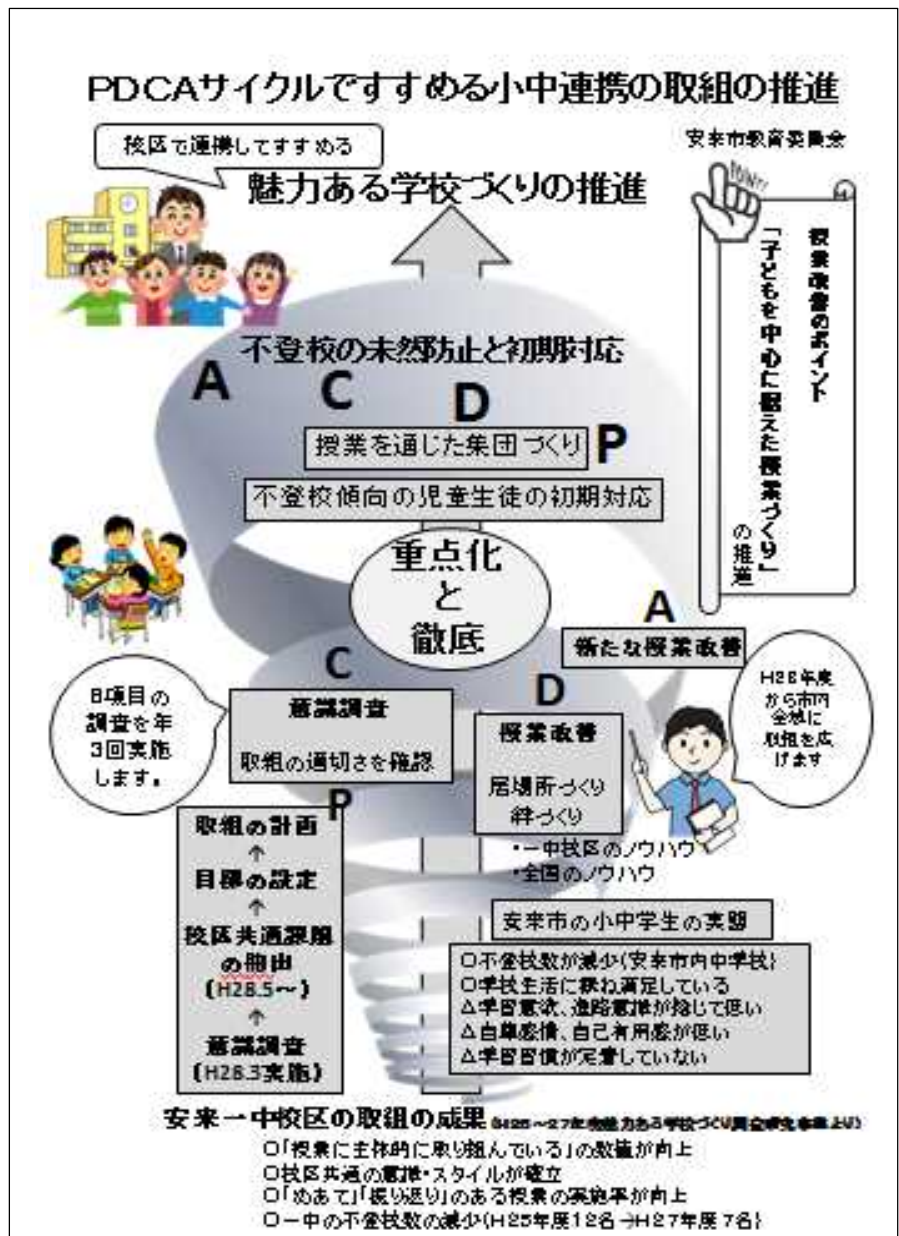
松江教育事務所管内では「安来一中校区」が第Ⅲ期魅力ある学校づくり調査研究事業（H26・27年度；文部科学省・国立教育政策研究所）の指定を受け、不登校やいじめ等の未然防止を目的に調査研究を進めてきました。安来一中校区の取組で注目すべき点は、子供たちが喜んで登校し、いきいきと生活を送る「魅力ある学校づくり」を進めるために、「授業改善」に焦点をあてて校区全体でこの事業に取り組んだところです。2年間の取組の結果、一中校区では、授業に主体的に取り組む児童・生徒の増加、中学校の不登校生徒数の減少などの成果を得ました。H28年度は「安来市教育委員会」が第Ⅳ期事業の指定を受け、一中校区で培ったノウハウをもとに、「授業改善に向けた中学校区の小中連携」を市内の各中学校区に広げていこうと取組を進めています。

【H28年度前半の取組】

各校の担当者が集まった会議で、五つの校区ごとに子供たちへの意識調査の結果をもとに、校区の子供たちの課題をつかみ、目標を定め、具体的にどのような「授業改善」に取り組むのかを話し合いました。

具体的な実施は2学期からになりますが、夏季休業中の各中学校区の合同研修会や、各校の研究職員会により、教職員の共通理解を深めて取り組んでいきます。

そして2学期末には意識調査等をもとに、校区の取組が有効であったかを検証し、取組を改善していきます。



総合的な学習の時間を点検してみましょう

毎年、各校から提出いただく「小学校・中学校学校経営概要」には、総合的な学習の時間のテーマと概要について記述いただく箇所があります。それを見ると、すべての学校で学校の実態や地域の特色を生かした学習活動が工夫されていることがわかります。しかし、数年にわたって同じ内容の学習活動を継続的に実施しているうちに、総合的な学習の時間の本来の趣旨が薄れてくる場合があります。その場合、総合的な学習の時間として「内容が兼ね備えるべき要件」から各校の内容を点検し修正するとよいでしょう。以下にポイントをまとめましたので、自校の取組が総合的な学習の時間の目標の趣旨を十分に生かしたものになるよう、ご活用ください。

内容が兼ね備えるべき要件

- ①横断的、総合的な学習としての性格をもつこと
- ②探究的に学習することがふさわしいこと
- ③学習や気付きが自己の生き方を考えることに結び付いていくこと

①体験活動が目的になっていませんか

「体験活動の準備→体験→事後のまとめ」という一連の学習は、児童生徒が課題を設定し、探究する場面が抜け落ちている場合があります。

ex.「職場体験をしよう」、「郷土芸能を学ぼう」、「福祉施設を訪問しよう」、「米作りに挑戦」etc…



②調べ学習が目的になっていませんか

「調べて、まとめて、発表する」という一連の学習は、児童生徒が自ら追求したい課題ではなく教師が提示した課題について調べていると、探究的な学習になりにくい場合があります。

ex.「地域の〇〇を調べよう」、「地域の〇〇発見」、「ふるさとの〇〇に学ぼう」etc…



③スキルの習得が目的になっていませんか

情報活用スキル等を身に付けるためだけの学習は、自己の生き方を考えることには結び付きません。

ex.「パソコンを使ってみよう」、「インターネットで調べよう」、「プレゼンテーションソフトで発表しよう」etc…



④教科等の学習内容になっていませんか

教科等の授業で学習すべき内容を取り扱う学習は、総合的、横断的な学習になりにくい場合があります。

ex.「平和について考えよう」(社会)、「英語で楽しもう」(外国語活動)、「上級学校について調べよう」(特別活動)etc…



⑤単元(学習内容)が多くなりすぎていませんか

一つの学年に、相互に関連性の薄い単元(学習内容)が複数計画されていると、それぞれの単元に当てる授業時数が少なくなり、探究的な学習になりにくい場合があります。

